

日本医歯薬アカデミーと私

高石 昌弘

日本医歯薬アカデミーの平成 26 年度理事会・総会が開かれたのは 2014 年 4 月 9 日であった。会場は恒例のホテルフロラシオン青山 3F「かつら」であったが、例年に比べ出席者が少なく少々寂しい思いがした。かつて、「はあといん乃木坂」（健保会館）で開かれていた頃は学術会議からの交通の便が良かったこともあって盛況だったのかなと昔を懐かしんだことを思い出す。

それはともかくとして、この日、アカデミー顧問の岡田晃先生から「そろそろこのアカデミーも設立 30 周年が近いので記念誌を刊行したらどうだろう」との提案があり協力を依頼された。早速編集業務のための日程が図られ、7 月 26 日に岡田先生、小林義典先生、筆者および事務局から里見修司氏、家根谷定雄氏が参集して（金岡祐一先生、瀬戸皖一先生はご都合で欠席）具体的な企画が話し合われた。その結果、会員の皆様に執筆の依頼がなされたわけである。既に「日本学術会議第七部のあゆみ」が数年前に刊行されているので、内容的に重複の感があり、いささかの危惧がなかったわけではないが、アカデミーとしての記録は別の視点からの産物として意義深いはずである。

筆者が日本医歯薬アカデミーに関わりを持ったのは、日本学術会議第 16 期会員に選ばれた 1994 年からである。その後、第 17 期も会員として仕事をさせて頂いたが、第 18 期以降は現役を退いた。しかし、医歯薬アカデミーでは、当時の岡田会長、次の鴨下重彦会長、金澤一郎会長そして現在の金岡祐一会長のもとで、内田安信先生と共に監事役を務め今日に至っている。

医歯薬アカデミーとして忘れ難いのは何ととっても毎年行われていた学術会議第七部の夏部会の思い出である。学術会議会員をリタイアしてからも OB の形また医歯薬アカデミーの立場で夏部会にはできるだけ参加してきた。随分いろいろなところで夏部会は開催されてきたが、三輪史朗先生ご夫妻、岡田先生ご夫妻、橋本嘉幸先生ご夫妻、内田先生ご夫妻、鴨下先生ご夫妻を始め多くの先生方そしてご家族の皆様と共に筆者も家内同伴で夏部会を楽しむことができた。当時の写真を見るといろいろな場での楽しかった思い出が甦ってくる。第七部夏部会として開催されたセミナーも常に格調高いもので大いに勉強となったが、それに付随して行われた各所の観光ツアーの楽しさは本当に素晴らしい思い出である。

さらに、筆者にとり忘れ難いのは「医歯薬アカデミーNEWS」のことである。亡くなられた橋本先生ご自身が「日本学術会議第七部のあゆみ」のなかで述べておられるとおり、「医歯薬アカデミーNEWS」の刊行は橋本先生のご提案になり、当時の第七部長金岡先生のご賛同により実現したものである。各地で行われた夏部会の折のシンポジウム内容を編集し記録に残していこうというのが、橋本先生の構想であった。その第 1 号は当時の日本医歯薬アカデミー会長八木国夫先生の発刊の言葉、そして金岡先生の論説に続いて「我が国の医療体制とその問題点」と題するトピックスや随想などが掲載されており、大変懐かしい内容である。その後も橋本先生は精力的に、原稿依頼、写真撮影、デザインおよび編集、さらに下刷り、印刷屋への出稿など全部お一人で進めておられた。先生ご自身の述懐からも窺えるが本当に大変なご努力だったことと今更ながら敬意を新たにす次第である。なお、その後この冊子は瀬戸先生のご尽力で刊行されており、感謝に堪えない。

ともかく、組織再編の後に日本学術会議第七部は新しい組織としての第二部に組み込まれ今日に

至っているわけだが、多くの賛助会員による財政的なご支援によって成り立ってきた日本医歯薬アカデミーの活動は、いろいろな意味で大きく評価されているものと考えている。現在でも医歯薬アカデミーとして学術会議の各研究連絡委員会の医歯薬系シンポジウムに僅かではあるが助成をしている。しかし監事として思うのは、ぜひとももっと多くの研究連絡委員会にこの助成を活用して頂きたいことである。そして、理事会・総会の折に、ぜひ現役学術会議会員の先生方がより多く出席され、意見交換の場が賑やかになることを期待している。

今後も日本学術会議第二部の医歯薬系会員との深い連携を保ちつつ、設立後 30 年を迎える日本医歯薬アカデミーが、多くの課題を抱えている今日の医歯薬関連分野のさらなる発展に寄与できるよう心から念じて筆を擱きたい。

●プロフィール

高石 昌弘

日本医歯薬アカデミー監事

日本学術会議第 17 期第七部副部長

日本学術会議第 16・17 期第七部会員

国立公衆衛生院長

東京大学教授

国立公衆衛生院名誉教授

東京医科大学客員教授